

# 教職あらかると

## わたしの道徳授業 No.7

2020.07 後藤 忠

### <わたしの道徳授業 12月号 1980年>

#### 1 道徳授業の見直し

これまでの「わたしの道徳授業」は過去の私の道徳授業であった。このあたりで、固定化し、形式化している私の道徳授業の見直しをしなければならない。

“初心忘るべからず”とは、初期の目的を貫徹せよという意味ではなく、もの事を始めようとする時の、未熟なういういしい心を忘れてはいけないという意味であるらしい。

普段、普通に行っている私の道徳授業について、初心に返り、授業評価を試みようと思うのである。昨年11月、父母会の授業参観で行った時の授業記録が残っているので、それで評価をしてみたい。

#### 2 道徳授業評価の観点

「道徳教育」(No.193 明治図書1月号1977)に久保千里先生が書かれた「子どもの実践からみた道徳授業の評価」を参考にして、次のような評価の観点を定めてみた。

##### 1 事前準備における評価

- (1) 児童の道徳性の実態把握が確実であったか
- (2) 「本時のねらい」が適切であるか
- (3) 資料の選択、資料構成の把握が適切であるか
- (4) 学習指導案はよいか
- (5) 板書構成は意図をもって準備されているか

##### 2 指導時間中の評価

- (1) 道徳授業を行う学習の雰囲気づくりははできていたか
- (2) 学習の動機づけはよいか
- (3) 導入の発問は適切か
- (4) 資料提示の時機はよかったか
- (5) 資料の種類(読み物資料、視聴覚資料など)はよかったか
- (6) 資料提示の方法(全文、分断、削除など)はよかったか
- (7) 資料は子どもの心をとらえるものであったか
- (8) 中心発問は適切であったか

- (9) 基本発問が適切であったか
- (10) 補助発問、助言、指示が適切であったか
- (11) 実践意欲に訴える授業だったか
- (12) 共同思考がうまくできたか
- (13) 児童の発言の取り上げ方が適切であったか
- (14) 児童はよく考え、活動したか
- (15) 板書、発問カード、補助資料などは効果的であったか
- (16) 個別指導がなされたか
- (17) 時間配分は適切であったか
- (18) 全体としてねらいは達成されたか

##### 3 事後における評価

- (1) 事後評価の具体策があるか
- (2) 各教科等との関連をどう図るか
- (3) 個別指導及び家庭との連携をどう図るか

ここで使う実践事例は父母会の参観授業で行ったもので、評価を意図して特別に準備して授業ではない。そのため、評価の観点1の(1)、(5)の記録はない。

#### 3 授業の実際

父母会が近づいてきた。まだ見てもらっていない科目の内、「道徳」を見てもらおうと思った。どうせやるなら家族や家庭生活に関係する内容がよい。それでは家族愛をやろう。

どうせやるなら、ただ授業を参観してもらっただけではもったいない。父母に自分の子どもの授業記録を取ってもらおう。多くの父母は自分の子どもの様子しか注目していない傾向があるので、それを利用？して、授業後の懇談会の話題(材料)となる個人の授業記録を取ってもらおう。悪知恵が働いてやってみることにした。

**道徳学習指導案** 第4学年2組38名(男22、女16)

**資料** おかあさんへの請求書(学研:みんなの道徳)

主題名及び主題設定の理由 (略)

本時のねらい

父母など家族に対して感謝の念や親愛の情もち、家族の一員としての役割を果たそうとする心

情を養う。

授業は5校時である。昼休みに父母に集まってもらい、記録用紙を配布して記入の仕方を説明した。

私は今まで抽出児の授業中の発言や様子、つぶやきなどを1時間を通して追跡し、記録することを行ったことがあるが、学級のほぼ全員についてそれをやるなどとは夢にも思ったことがなかった。この思いつきは、我ながらなかなかよい思いつきだった

と思う。

しかし、教師ではない父母が、詳しく正確な記録を取ることにあまり期待はしていなかった。つまりこれは、私の研究のためではなく、あくまでも父母が子どもの学習の様子を客観的に把握するための手段として行なおうとしたのである。(副産物として研究に役立つものが産まれたなら、それに越したことはない。)

### 指導過程

学習活動 (○発問など)	評価の観点 (*)	発言が多かったA児、B児、C児の反応
1 お手伝いの経験について話し合う。 ○ どんなお手伝いを、どんな気持ちでしているか。	*学習の動機づけとして、課題はふさわしかったか *各自が率直に生活経験を発表したか	A:自分がしたいことをしているときはいやだ と思う。 B:お皿をふいたりしたときなど、お母さんが喜んでくれるとすっとする。
2 「おかあさんへの請求書」を読んで話し合う。(範読) ① よしおはどんな気持ちでこの請求書を書いたか。	*よしおの気持ちを主体的に受け止めた発言内容だったか	C:お使いなどをただでやると損をするという気持ちで書いたと思う。
② 黙って百円玉を差し出したお母さんはどんな気持ちだったか。	*自分の考えをもって、友達の考えを聞いていたか ・よしおへの驚き、不信 ・よしおへの信頼	A:どうしてこんなにお金を欲しがるのだろう。でも、後で返してくれるだろうと思っただけではないか。 B:よしおにはいろんなことをやってあげているけど、お金なんかもらってないわよ。だからきつと返してくれるだろう。
③ お母さんはどんな考えで全部0円の請求書を書いたのだろうか。	*子どもを養い育てることは金銭では表せない親の深い愛情によるものだという事を心情的に理解できたか。	A:最初からお母さんはよしおの気持ちを見抜いていて、よしおを直そうと思っていた。元のよしおに戻ってほしいと思っていた。 B:よしおがお金をもらうのならお母さんももらおうよという気持ちだったと思う。 C:お母さんはよしおの気持ちを見抜いていたのだと思う。
④ いろんなことをお母さんは考えたと思うが、その中でどの考えが一番強かったと思うか。(補助発問)	*出された意見を総合的かつ客観的に見つめ直し、より深まった考えがもてたか。	A:ぼくは、よしおを直そうという気持ちだったと思う。訳は、そんなにお金を欲しがってはいは(将来)困るじゃないかという気持ちからだっただけだ。 B:お母さんももらおうかという気持ちだったと思う。訳は、0円の請求書を出したということは、何ももらってないよということを書いたからだった。 C:ぼくは、ぜいたくを言うなという気持ちだったと思う。

<p>⑤ よしおは目にいっぱい涙をためながら「ぼく、お金いらない」と言った。よしおはお母さんに、他に何が言いたかったのだろう。</p>	<p>*よしおの考えが変わった訳が共感的に理解できたか。</p>	<p>A：この請求書に書いてある通り、お母さんは今までよしおにいろいろ親切にして、いろんなことをしてくれたのに、自分は小さいことにお金をもらおう、もらおうとしていたことにごめんなさいという気持ちがあったのだと思う。</p> <p>B：よしおはお金をもらったけど、お母さんはたくさん仕事をしているのにお金をこれっぽっちももらっていないので、よしおは涙を流していったのだと思う。</p> <p>C：ぼくは、よしおはお母さんからお金をもらう資格がないということに気づいたのだと思う。</p>
<p>3 今後の生活について話し合う。</p> <p>○ 今後君たちは、どんな気持ちでお家の人たちと暮らして行ったらよいか、考えをノートに書こう。</p>	<p>*終末に生活に目を向けさせた学習課題は適切であったか。</p>	<p>A：これからは両親のやっている気持ちや考えを思い、自分のやっていることと比べながら生活して行ったらいいと思う。</p> <p>B：お母さんはいろいろやってくれているのだから、ぼくもいろいろ手伝って生活していく気持ちで暮らしたい。</p> <p>C：どんなことも、いやがらないでやっていきたい。</p>

父母用 授業観察記録用紙 「おかあさんへのせいきゅう書」 昭和54年11月		
記入の仕方		
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ありのままを、ありのままに書いてください。（「よい」「わるい」の判断は一切しないでください。）</li> <li>2 発言がないときも、動作や様子を書いてください。</li> <li>3 教室のどこから参観されても構いません。よく見える位置からご覧ください。</li> <li>4 道徳の時間では次の2つを守ってください。           <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 道徳には正解、不正解はありません。ですから、どんな発言も笑わないでください。</li> <li>(2) 道徳の時間に考え、話し合った内容について、家でとやかく叱責しないようにしてください。</li> </ol> </li> </ol>		
児童名 (安野 光彦)		
教師の質問 (注：あらかじめ印刷)	動作や様子 (聞き方、発言の仕方)	発言したこと
家でどんなお手伝いやお使いをしますか。どんな気持ちでしていますか。	考え込んでいる、友達の意見にうなずいている。 初めは緊張気味だったが、手はあげていた。	
資料「おかあさんへのせいきゅう書」を読む。	正しい姿勢で先生が読まれるのを自分でも目を通して読んでいた。	
よしお君はどんな気持ちでせいきゅう書を書いたのでしょうか。	よく手があがっている。 緊張がほぐれてきたようだ。	
黙って百円玉を差し出したお母さんはどんな気持ちだったのでしょうか。	手はあまりあがらず、2回ほど手をあげた。 友だちの意見をよく聞いている。	

お母さんはどんな考えで全部0円の請求書を書いたのでしょうか。	始めはよく手をあげていたが指されないのであげなくなった。 最後に指され、大きな声ではきはきと答えられた。	よしお君をお母さんは試してみようと思った。よしお君が百円玉を返さなかったらもうだめだと思おうし、百円玉を返したらよしお君は悪いのが分かったことになる。
「お母さん、ぼくお金いらない」と言ったよしお君はお母さんに何が言いたかったのでしょうか。	直ちに手をあげる。 友達が答えている方をじっと見つめながら聞いている。	
これから、どんな気持ちでお家の人たちと暮らして行ったらよいでしょう。	じっと考えているが手があがらない。(言いにくい人はノートに書いて先生に見せに行く。) 友達が先生に見せに行くとき気になったのか、横目で見、急いで先生のところに見せに行く、満足そうに席にもどる。(2番目に先生のところへ見せに行く)	お手伝いなどのまれば、今までいろいろとやってもらった代金とひきかえに、ありがたくやってあげようと思う。
ありがとうございました。担任まで出してください。		

本授業の記録はもう一つある。

それは「話し合い活動」改善のための資料である。私は、話し合い活動は教師と子どもの発問→応答のやり取りだけで行うのではなく、子ども同士の相互指名による話し合い活動も有意義だと思って、多く取り入れている。その相互指名の実際を発問ごとに座席表に記入した授業記録である。

その結果、本授業での教師の発言の回数は教材提示・発問・指示・助言など、すべて含めて11回、一方、児童の発言回数は43回であった。この数値だけ見るといかにも子どもたちが活発に学習を展開していたように思えるが、さにあらず、1度も発言しなかった子が13名もいたことがわかった。これは相互指名の盲点、欠点といえるものであろう。

### 3 授業評価（「2 道徳授業評価の観点」から一部）

#### <1 (2) 「本時のねらい」について>

「父母などに対し、感謝の念や親愛の情をもつとともに、家族の一員としての役割を果たそうとする心情を養う。」

このねらいは2つの要素を含んでいる。1つは「感謝の念や親愛の情をもつ」ことであり、もう1つは「家族の一員としての役割を果たそうとする心情を養う」ことである。

第一のねらいは低学年の内容であるが、中学年の内容である第二のねらいが、より明確に心情化され

るためにはどうしても必要であると考えて設定した。

中学年のこの時期になると、自己中心的な考えを反省できるようになってくる。損得利害で家のお手伝いをするのは当たり前だと考えているなら、親の立場になって客観的に考える機会を用意することは必要だと思った。

このねらいは明確であり、ねらいのポイントが二つあるが十分に時間内には達成可能だと思われる。

#### <1 (3) 資料選択・資料構成の把握について>

「おかあさんのせいきゅう書」の原話は、たしか外国のものであったように思う。この資料は以前からやってみたくも思っていたものである。お手伝いに対する子どもの素直な気持ちがよく表されているし、母の無言の諭しが実のみごとに0円によって表されている。その内訳はしみじみとしたもので、親に対する親愛の情や感謝の念を子どもの心に再燃させるであろうと思った。

文章もわかりやすく、無駄がない。起承転結の構成になっていて、自然にお話の中に引き込まれていく。登場人物の行動や仕草がよく表されているが、その気持ちや考えを直接表す表現が少なく、道徳の資料としてふさわしいと考えた。

#### <2 (1) 道徳授業の学習のふんい気づくりについて>

安全で、楽しく、美しく、生き生きとした、一人一人を大事にする学級経営の方針に即して、道徳授

業に努めている。前掲の「観察記録用紙」の注意事項にも書いたように、子どもたちとは次のような二つの約束をしている。

\* 道徳の時間には教科のような正解、不正解はない。したがって、真剣に考えた発言に対して嘲笑したり、馬鹿にしたりしてはいけない。人の考えや意見を正確に理解しながら、自分の考えと較べて聞くようにしなければならない。

\* 道徳の時間は先生と子どもたちが一緒に創っていく時間である。だから、道徳の時間は「自分が創る」という気持ちで学習しよう。なお、道徳の時間に考えたこと、発言したことについては後で責任を取らなくてもよい。自分に正直であればそれでよいのである。

また、道徳の時間における教師(私)の役割の90%は子どもの学習の交通整理に徹しようとしている。自分の価値観や登場人物の心情理解の押し付けなどはしないように戒めている。授業中の子どもの考えや発言を分類・整理し、彼らが筋道を立てて考えられるように学習状況の整理に努めている。

なお、残りの10%は子どもたちが困りぬいて、「先生！」と言ってきた時に、「あくまでも参考までだが…」と自分の考えを言わなければならないときのために残しておく。

このような約束や留意点のもとで道徳授業を行っていくと、子どもは道徳の時間が好きになってくるようである。特に、教科の勉強がにがてな子どもほど楽しみにしているようで、やむをえず道徳の時間をカットする時などは本当にガッカリする。

ただ、今回の授業は父母が参観していたというこ

ともあってか、いつものような自由奔放な発言や、互いに激しく意見を交わすといった場面はなかったことは残念であった。その点、世田谷の子は墨田の子とは違うと思った。

墨田の子は逆に、こちらが戸惑うほど張り切ったものだが…。

(東京都世田谷区立東大原小学校教諭)

<あとがき> 2020.07 後藤 記

今回はためらうことが多く、なかなか筆が前に進まなかった。恥を忍んでひと言付け加えさせていただきたいことがある。

現在の私が、もし40年前の私の道徳授業を指導・助言するならば、相当厳しいNGの連発になると思う。そのことをどうぞご理解いただきたい。

この授業は「道徳駆け出し」の頃の授業だから、未熟であって当然、仕方がないことだと承知しているが、だからこそ、ここに掲載した実践事例や何の疑いもなく平気で使っている言葉などを鵜呑みにしないでいただきたい。間違っても「これが正しい」とか「真似しよう」などと、絶対に思わないでいただきたいのである。(蛇足ながら、もし参考にしていただけるならば、INDEX「A 道徳科学習指導案作成(超)×3 入門」や「B 特別の教科 道徳の基礎基本」の方にさせていただきたい。)

いずれにしても、未熟な青年教師の道徳授業への熱い思いとか、道徳愛みたいなものだけのご理解に止めていただければ、真に有り難いのである。